

# 中世末期口語における「べし」の後身

——『天草版平家物語』の訳語による——

山口 堯 二

## 〔抄録〕

助動詞「べし」は、中世になると文語化して、口語の世界では次第に衰退する。中世末期にはその時期の口語訳『天草版平家物語』がある。その原文と見込める「べし」の用例と対照させて、「べし」の訳語を調査すると、かつての「べし」に代替されている口語の助動詞には、「うず」「う」「さうな」の三語が認められる。その分布をもとに、その時期における「べし」の代表的な代

替語は「うず」であったと判定するとともに、中世末期におけるその三語の「べし」との対応関係を中心に、その時期の広義の推量体系の一端を照らし、その通時的な変化にいささかの見通しをつけることをめざした。

キーワード 「べし」、「うず」、「さうな」、推定、助動詞

## 一 はじめに

ようやくその使命を終えようする語がある場合、それまでその語が担ってきた意義の表示は、多くの場合、より新しい形式によって何ほどか改められつつ、継承されるのではないだろうか。助動詞「べし」は中世口語の世界では次第に衰退し、文語化していく。中古から中世にかけての文献資料の中で、その「べし」がどのような方向に変

化していったかについては、「べし」の通時的変化」と題して別に調査考察を試みた（以下、それを前稿と呼ぶ）。それを踏まえて、ここでは中世末期の口語の世界で、「べし」がどの程度残っており、「べし」の失われた面の後身、ないし、後継者としてはどのような語が用いられるようになっていたかを検討する。

さいわい、室町末期には、平家物語をその時期の口語に訳した『天草版平家物語』がある。その口語訳に用いられた当の原文は判明して

いないが、その巻一は、『覚一本平家物語』によく対応し、その他の巻は、『百二十句本平家物語』によく対応すると言われている（以下、それぞれに、天草版、覚一本、百二十句本と略称する）。そこで、巻一については覚一本を、巻二以下については百二十句本を、原則としてその原文と見込み、それらにおける「べし」の用例と天草版の訳文とを対照させて、かつての「べし」に対応する口語のありようを探ることにする。なお、その見込みのもとに、便宜「原文」「訳文」の語を用いることもある。ただし、天草版巻二以下の本文にも、明らかに覚一本のほうが近い箇所などもあるため、例外的にあえて覚一本を原文と見込んだ箇所もある。

覚一本の本文には、日本古典文学大系本（岩波書店）の『平家物語（上・下）』を、百二十句本の本文には、新潮日本古典集成本（新潮社）の『平家物語（上・中・下）』を用いる。

天草版における「べし」の訳し方には、原文とほとんど差のない場合もあるが、多くは他の語や連語に言い替えられている。しかし、共起する打消の意を併せた訳などは除いて、「べし」自体の訳語になっている助動詞は、「うず」「う」「さうな」の三語に尽きる。そのうち「うず」と「う」は、原文にも多い「んず」「ん」の転じたものであるが、「さうな」は室町期に現れたいわば新出の助動詞であり、それを訳語とする例もまだ極めて限られている。

そこで、調査の結果は、まず「うず」「う」を訳語とする例を中心に、主としてその両訳語の広がりを見定め、「さうな」を訳語とする例には、そのあとで言及することにしよう。

覚一本・百二十句本の例と天草版の訳とは、それぞれその順に対置して示し、各セットのはじめに通し番号を付ける。天草版の訳文については、なるべく肝心の箇所を訳し方がわかる範囲に限定して示す。なお、天草版の表記は、いままでもなくポルトガル式のローマ字綴りであるが、本稿の目的は、天草版の表記やそこにかがえる当時の発音を示すことにはないので、天草版についても、漢字平仮名まじり文に翻字して示すものとする。

## 二 訳文に残る「べし」

天草版の訳にも、一部には「べし」が残っている。また、残っていないというより、原文のまま口語訳の対象にされていない部分もある。

まず、原文のままに置かれている部分には、和歌・歌謡・漢詩文・赦免状・道行文などがある。和歌の例は多いが、いずれも原文のままである。道行文というのは、天草版巻四第十二に出てくる、「重衡の東下りの事」のそれで、そのはじめに「ここはとつと面白い所でござるほどに、ほんほんに節をつけて語りませう」とある。これらの部分に含まれる「べし」は、口語訳の対象にはされていないものである。

それに対して、口語訳の対象にはされながら、その訳文中に「べし」が残っていると見える場合がある。その残り方には、四つのタイプが見出せる。その一は「しかるべし」「さるべし」という成句に含まれるもの、その二は「つべし」の形で残っているもの、その三は「べうもない」「べうはない」の形で打消と共起する連用形「べう」、その四は当為を表す連体形「べい」である。

まず、その一、「しかるべし」「さるべし」という成句に含まれるものには、たとえば次のような例がある。

(1)しばしの命いき候はんずる事は、然べう候へ共、(寛一本・二・少将乞請)

・……然るべうござれども、(天草版・一・五・四〇頁)

(2)しかるべき便もあらば、いかにもして彼鳴へわたつて(寛一本・二・卒都婆流)

・しかるべし便りがあらば、……(天草版・一・九・六六頁)

(3)さるべきたよりもなかりけり。(百二十句本・十二・時忠能登下り)

・さるべいたよりもなかつたに、(天草版・四・二十三・三七二頁) 天草版における同様の例には、「しかるべからぬ」(二五九頁)「しかるべからう者」(三二八頁)などもある。いずれも成句として熟したものが、中世末期の口語にも継承されていたと見えるが、それらは成句としての使用であるから、「べし」が単独で用いられたものではない。よって、この残り方は「べし」自体が一つの語としてその時期の口語に用いられているものとは区別する必要があらう。

その二、「つべし」の形で残っているものというのは、次の二例である。

(4)さだめて今は屋島の大臣殿の見参にも入りつべしとこそおほえ候へ。(百二十句本・十・重衡東下り)

・……見参にも入りつべしと存ずる。(天草版・四・十二・三〇〇頁)

(5)雨原憲が樞をうるほす、とも言つつべし。(百二十句本・十二・

大原御幸)

・……、とも言つつべし。(天草版・四・二十七・三九六頁)

これらの「つべし」における「べし」は、ク活用の「べし」とは違つて、シク活用になつてゐる。次に述べるその三・その四の残り方から見ても、「べし」がク活用であることには変わりないから、これらの「つべし」は、連語「つべし」が熟して一語化する動きの中で、新たに派生した口語と見るべきであらう。室町期には、他の文献にも、たとえば次のような「つべし」の例がある。

・某ひとりむすめをもつてござあるが、似合つべしひむごがござなひに依て(虎明本狂言・夷毗沙門)

・我身を貴ブ事ガ、天下ヨリモ尊ブ者ナラバ、天下ヲアツケツベシイゾ(莊子抄・在宥篇・二39ウ)

よつて、「つべし」の中の「べし」も、「べし」自体が一つの語としてその時期の口語に用いられているものとは区別しなければならぬ。なお、この調査では、原文の「つべし」の訳も対象に含めてゐるが、ここに述べた「つべし」の一語化を考慮して、単独の「べし」に対する訳とは一応区別して言及してゐる。

その三、「べうもない」「べうはない」の形で打消と共起する連用形「べう」は、かなり例が多い。それには次のような例がある。

(6)時雨も、霜も、おく露も、漏る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。(百二十句本・十二・大原御幸)

・……たまるべうも見えなんだ。(天草版・四・二十七・三九六頁)

(7)行く末とても楽しみあるべうもなければども、(百二十句本・七・

平家一門都落ち)

・……頼みあるべうはなけれども、(天草版・三・八・一九三頁)

(8) 我身もつきせぬもの思にたへしのおべうもなしなど(覚一本・

二・大納言死去)

・……たへしのおべうもないと(天草版・一・八・六三頁)

(9) 出家のことあるべうも候はずとぞのたまひける。(百二十句本・

十・重衡東下り)

・……あるべうもないといはれた。(天草版・四・十二・三〇二頁)

「べし」の意義別に見れば、(6)(7)は結果、(8)は可能、(9)は適当をそれぞれ表す例である。積極的な意義の偏りは特になさそうである。しかし、過去の打消の助動詞「なんだ」と共起する例(6)を除いて、いずれも形容詞「ない」と共起している。その上、「べうはない」の例は(7)にあがる一例しかなく、例(6)(7)を除いて、多くの例は「べうもない」という形を共有しているので、「べうもない」はその形で成句に近い複合辞になっていたと見ることもできよう。

なお、次のように「つべし」の形にも、同様の例がある。

(10) われも尽させぬ物思ひに長らへつべくもなしと(百二十句本・十

・平家の一門首渡さるる事)

・……長らへつべうもないと(天草版・四・十・二八八頁)

その四、当為を表す連体形「べい」というのは、次の二例である。

(11) 子をば人のもつべかりける物かなとぞ、(覚一本・二・少将乞

請)

・子をば人のもつべいものかな、(天草版・一・五・四一頁)

(12) 今は見るべきことは見はてつ。(百二十句本・十一・早鞆)

・今は見べいほどのことは見はてつ。(天草版・四・十八・三四七頁)

当為を表し、しかも連体形で連体法に用いるこのような用法は、室町期の口語にも残っていたと見てよいだろう。たとえば、次のように抄物類にも似た言い方の例がある。

・スベイ程ノ事ヲシテ、進ムヲ漸ト云ゾ。(周易抄・五42才)

天草版の例はわずかに二例ながら、この連体形「べい」には、当為という意義を中心に意義上の制限があったと見てよからう。

「べし」の残り方に区別した四タイプのうち、「しかるべい」「さるべい」などの成句中の例と、「つべしい」の形で残っている例は、連語が熟して一語化した中における語源的な残存であり、一つの助動詞として生きて使える語とは、区別すべきものであった。したがって、天草版からうかがえる中世末期口語としての残存は、「べうもない」「べうはない」などの、打消と共起する連用形「べう」と、当為を表す連体形の「べい」だけとなる。ただし、打消と共起する連用形「べう」の例のうち、例(6)(7)を除く、いちばん例の多い「べうもない」はその形で成句に近い複合辞と見うる点があった。単独で使える「べし」はそれだけでに限り、連体形「べい」に認められるように、

意義上の制限も濃くなっていたと思われる。

連用形の「べう」の残存には、「うず」や「う」に連用形が存在しないため、それらで代替しにくいことが、その原因になったかもしれない。しかし、当為を表す連体形の「べい」には、活用形の上で「う

ず」や「う」に代替させにくい点はない。現に「べし」の連体形「べき」の多くは「うず」で訳されているからである。連体形「べい」の残存は、当為の意義を中心に、「うず」の連体形よりも「べい」のほうが明示的であり、そのより明示的な言い方が口語の世界でも必要とされたためではないだろうか。

### 三 訳語「うず」「う」を中心に

「うず」「う」を訳語とする例は、全体として極めて多いので、それらの訳語については、原文における「べし」の意義との関係や文脈による偏りの有無も確かめる必要がある。

「べし」の意義の分類法の詳細は前稿に譲るが、その要点だけをいえば、推定対象と推定作用とを区別して、それらを両立的に捉えることを基本方針とし、対象的意義には状態・結果・可能・適当・当為の五つ、作用的意義には事柄めあてのそれである推定と、对人的なそれである意志・勧誘・命令とを、それぞれ区別した。事柄めあての推定は、対象的意義のすべてと本来つねに両立するが、对人的な意志・勧誘は、対象的意義の適当とのみ両立し得るのであり、命令は当為とのみ両立し得ると見なした。しかし、特に必要がない限り、本稿では対象的意義と作用的意義との両立性については、なるべく一々の言及を省き、たとえば結果を表す、意志を表すなどの、より端的な言い方をすませる。

中世の「べし」には、状態・結果・可能を表す現実的な表示性が相対的に後退して、適当・当為を表す観念的な表示性が強まり、意志・

勧誘・命令・反語・否定といった志向的な情意を担う傾向もめだつてきた。③。そのような「べし」の側の通時的変化も参考にしつつ調査した結果、「うず」と「う」のどちらが訳語になるかについては、「べし」の意義との関係以外に、疑問表現・反語表現、仮定表現との共起も、その訳語のありように関係していることに気付いた。

そこで、訳語「うず」「う」を中心とする調査の結果については、(1)「べし」の対象的意義の別と訳語との関係、(2)特定の对象的意義とのみ両立する、意志・勧誘・命令と訳語との関係、(3)疑問表現・反語表現・仮定表現における「べし」と訳語との関係に分けて、それぞれ検討していく。ただし、このうちの(1)については、(2)(3)の調査対象との重複を避ける意味で、(2)(3)を除く範囲に限定し、その範囲の対象を平叙表現と呼ぶことにする。したがって、その調査結果については、(a)平叙表現、(b)意志・勧誘・命令表現、(c)疑問・反語・仮定表現という順序で、それぞれにおける「べし」の訳語を検討することになる。(a)(b)(c)の区別は、基本的に「べし」の用いられた原文の表現性に基づくが、時にそうでない意識についても、訳語の傾向を示す意味で参考に取り上げることがある。

#### 三の一 平叙表現の場合

まず、(a)平叙表現における「べし」について、それとの対応が見込める訳を検討すると、その訳語には「うず」と「う」の例がどちらも認められる。しかし、その両者の量には大差があつて、「う」の例は極めて限られている。また、「うず」を訳語とする例は、すべての対

象的意義の「べし」に認められるので、助動詞「うず」が最も一般的な訳語になっていることがわかる。

まず、その点を示すため、「べし」の対象的意義の別に、それぞれ訳語「うず」の例を示そう。「べし」の表す対象的意義から言えば、(13)が状態、(15)(16)が結果、(17)(18)が可能、(19)(20)が適當、(21)(22)が當為を、それぞれ表す例である。

(13) わづかの竹の編戸なれば、あけずとも押し破らんことやすかるべし。(百二十句本・一・義王出家)

・……押し破らうずことはやすからうず。(天草版・二・一・一〇四頁)

(14) 若一人も留められんは、中々罪業たるべう候。(覚一本・二・赦文)

・……なかなか罪業でござらうず。(天草版・一・十・七二頁)

(15) 人の願ひをかなへさせ給はば、……家門の栄花弥さかむに候べしなど(覚一本・二・赦文)

・……いよいよ盛んにござらうずと(天草版・一・十・七一頁)

(16) 北方はちかう座すべき人にておはしけるが(覚一本・二・少将乞請)

・……産をせられうずる人であつたが(天草版・一・五・三六頁)

(17) 院中に召つかはるゝ身なれば、執事の別当成親卿の院宣とて催されし事に、くみせずとは申べき様なし。(覚一本・二・西光被斬)

・くみせぬとは申さうずるやうもない(天草版・一・三・二六頁)

(18) 宇治川渡すべき馬は持たず(百二十句本・九・宇治川)

・……渡さうずる馬は持たず(天草版・四・二・二三二頁)

(19) やがて後世の御供仕べう候へ共(覚一本・三・僧都死去)

・……お供つかまるらうずることなれども(天草版・一・十二・九一頁)

(20) 兼平も、瀬田にていかにもなるべう候ひつるが(百二十句本・九・兼平)

・……いかにもなりませうずるを(天草版・四・四・二四四頁)

(21) たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばばかり給べきに(覚一本・一・殿下乗合)

・……憚られうずることぢやに(天草版・一・二・一五頁)

(22) 行綱こそ申べき事候間、まいッて候へと(覚一本・二・西光被斬)

・……申さうずる子細あつて、これまで参つたと(天草版・一・三・二二頁)

なお、「つべし」の形の訳にも、次のように「うず」を用いた例がある。

(23) その賞に誇る事は傍若無人共申つべし。(覚一本・二・教訓状)

・……とも申さうず。(天草版・一・六・四六頁)

平叙表現の「べし」にも、「う」を訳語とする例が次のようにある。しかし、「うず」を訳語とする例に比べると、その数は極めて少ない。

(24) 大納言夜さりきらるべう候なれば、成経も同座にてこそ候はむずらめ。(覚一本・二・少将乞請)

・……きられうとの沙汰ぢや、……(天草版・一・五・三五頁)

(25) 汝がまたこんたびを待つくべしとも覚えぬぞ。(覚一本・二・大

納言死去)

……待ちつけうとも覚えぬぞ。(天草版・一・八・六三頁)

(26)さらば景季も盗むべかりけるものを(百二十句本・九・宇治川)

……盗まうことであつたものを(天草版・四・二・二三三頁)

しかも、このうち、例(24)(26)は原文にない自立語「沙汰」「こと」などを含めた連語による訳とも言えるもので、それだけ直訳性に乏しい点もある。

平叙表現の「べし」の訳語には、原文にない自立語を含んだ連語による訳も少なくないが、その中には、「べし」の表す適當の意義を「……たればよし」などの連語でより分析的に訳した、次のような例もあつて、とりわけ注意される。

(27)女房の装束を借らせ給ひて、出でさせましますべう候。(百二十

句本・四・信連合戦)

……出させられたればようござらう。(天草版・二・二・一〇九頁)

(28)させるゆへなくとゞめたる人々の官ども、皆ゆるすべきよし仰ら

れければ(覚一本・八・法住寺合戦)

……皆前々の如くにしたらばよからうずと……(天草版・四・

一・二二七頁)

その一方、「べし」の訳には、それに対応する語が訳の上で省かれていると見てよい、次のような例もある。この二例はともに結果を表す「べし」の訳である。

(29)御運尽きさせ給はんのちは世を取らせ給はんことかたかるべし。

(百二十句本・七・平家一門都落ち)

……世を取らせられんことはかたい。(天草版・三・八・一八九頁)

(30)今不慮の恥にあはむ事、家の為身の為心うかるべし。(覚一本・

一・殿上闇討)

……心憂いことぢやほどに、(天草版・一・一・四頁)

結局、平叙表現の「べし」には、例(27)(28)のような連語によるより分析的な訳や、例(29)(30)のように対応する語の省かれた訳もあるものの、他の助動詞で言い替えている場合の訳語は、ほとんど「うず」であり、また、その訳し方は「べし」のすべての対象的意義にわたつて認められるのである。

三の二 意志・勧誘・命令表現の場合

次に、(b)意志・勧誘・命令を表す「べし」について、それぞれ対応が見込める訳のありようを述べる。

まず、意志を表す「べし」の訳には、ほとんど次のように助動詞「うず」が用いられている。その例は全体で二十二例確認できたのに対して、「う」を訳語とするその例と見うるのは、わずかに三例だった。次の(31)(32)は「うず」を訳語とする例、(33)は「う」を訳語とする例である。

(31)いづくの浦におはす共、我命のあらむかぎりはとぶらひ奉るべし

と(覚一本・二・阿古屋之松)

……とむらひ奉らうずと(天草版・一・七・五七頁)

(32)今度義経においては、鬼界、高麗、天竺、震旦までも、平家のあらんかぎりは攻むべき由をぞ申されける。(百二十句本・十一・

屋島

……攻めうずる由を申された。（天草版・四・十六・三二五頁）

(33) 実盛、今度のいくさに、命生きてふたたび都へ参るべしともおほ

え候はずと（百二十句本・五・富士川）

……参らうとは存ぜぬと（天草版・二・十・一五二頁）

なお、意志を表すといえ、覚一本・百二十句本では、助動詞「む（ん）」を用いることも多いが、天草版ではそれも「うず」で訳されていることが少なくない。

対他的な作用としての勧誘を表す「べし」の訳には、助動詞「うず」による例と、活用語の命令形による例とがある。まず、助動詞「うず」による例には、次のようなものがある。

(34) 福原へ下り給ふべき由の給へば、少将なくく出立給ひけり。

（覚一本・二・阿古屋之松）

・福原へ下られうずると仰せられたれば、……（天草版・一・七・五七頁）

この例は、宰相教盛の少将成経に対する発言である。この発言は、清盛から「存ずる旨あり。丹波少将いそぎ是へたべ」と言われて、やむを得ずなされている。覚一本の「べし」は、その意味で、当為と両立する命令とも解せなくはないが、天草版の訳は、勧誘の意に解すべきものである。

勧誘を表す「べし」の訳で、活用語の命令形によると見られるのは、次のような例である。

(35) いかさまにも御声のいづべう候とさゝやいてひきふせ奉れば、二

声三声ぞおめかれける。（覚一本・二・小教訓）

……お声をそつと出ださせられいと……（天草版・一・三・二九頁）

(36) あの成親卿うしなはれん事、よくく御ばからひ候べし。（覚一本・二・小教訓）

本・二・小教訓）

……よくよく御思案なされい。（天草版・一・四・三二頁）

「べし」の意義を区別する場合、勧誘と命令とはやや紛らわしく、時に判断に迷うことがあるのも事実である。しかし、前稿と同様に、勧誘は複数の動作的な選択肢の中での、相対的に最も適当とされる推定対象——適当と両立し、命令は絶対的になすべきありようとしての推定対象——当為と両立すると見て区別すれば、これらの例の「べし」は適当と解すべきものと思う。その訳文の命令形は、いずれも尊敬語（為手尊敬）と共起しており、その点で、次に述べる命令を表す「べし」の、非敬語形の命令形による訳とは区別できる。尊敬語と共起する命令形は、基本的に当為と両立しての命令という、強い対人的拘束性を発揮するものとは異なる可能性が高いと見ておきたい。

なお、勧誘の「べし」を尊敬語の命令形で訳した例には、次のように原文の「べし」が疑問助詞と共起している例も拾えた。この場合の疑問助詞は、普通の命令表現とは異なるその勧誘性をさらに和らげる働きを託されているようである。

(37) 射損じ候ふものならば、御方の長ききずにて候ふべし。自余の人

にも仰せつけらるべうや候と（百二十句本・十一・扇的）

……自余の人に仰せつけられいかしと（天草版・四・十七・三三

六頁）

命令を表す「べし」は、ほとんどが活用語の命令形で訳されている。しかし、一例だけ「うず」で訳されたと見うる例もある。次の(38)が「うず」を訳語とするその例であり、(39)(40)は命令形による訳の例である。

(38) 去んぬる一日は、義経申すによつて、鎮西の將軍たるべき御下し文をなされ、同じき七日には、頼朝申さるるによつて義経追罰すべき旨、院宣を下さる。(百二十句本・十一・義経都落ち)

・……鎮西將軍たらうずると御下し文をなされ、……義経追罰つかまつれと宣旨を下さるる。(天草版・四・二十五・三八二頁)

(39) 其儀ならば、少將をばしばらく御辺に預奉ると云べしと(覚一本・二・少將乞請)

・……預け奉ると、云へと(天草版・一・五・四〇頁)

(40) 魂はみな東国にこそあらんに、ぬけがらばかり西国へ召し具すべき様なし。とくとくとく下るべしと(百二十句本・七・平家一門都落ち)

・……とうとう下れと(天草版・三・八・一九〇頁)

なお、命令を表す「べし」が打消と共に起すれば、その打消の意を含めた意味は禁止になる。その禁止の意には、次のように終助詞「な」が用いられている。

(41) 丹波少將をば、此内へはいれらるべからず。(覚一本・二・少將乞請)

・……いれらるるな。(天草版・一・五・三八頁)

結局、意志、勧誘、命令を表す(b)の文脈の「べし」についても、拾

える例はその順に限られてくるが、他の助動詞で言い替えている場合の訳語は、ほとんど「うず」であつたといえる。対他的に勧誘を表す「べし」には、同じく対他的な命令を表す場合とともに、命令形による訳し方もあつたが、勧誘の訳は尊敬語の命令形による点で、一般動詞の命令形による命令の訳とは区別できそうであつた。

なお、勧誘・命令を表す「べし」の命令形による訳は、その場合の「べし」が担う適當・当為といった対象的意義は切り捨て、それぞれ対人的な作用的意義の勧誘・命令の意のみを言い換えたことになる。打消と共に起して禁止の意を担う場合の、終助詞「な」による訳についても、同様のことが言える。

### 三の三 疑問・反語・仮定表現の場合

次に、(c)疑問・反語・仮定の表現に用いられた「べし」について、それぞれ対応が見込める訳のありようを述べる。まず、疑問表現に用いられた「べし」の訳語には、助動詞「うず」と「う」の二語が認められる。

疑問表現に用いられた「べし」の訳語が「うず」になっている例は全体で八例、「う」になっている例は九例確認できた。そのうち、「うず」を訳語とする例はいずれも疑問助詞を疑問の標識とし、特定の解答を提示する特定方式(その単独方式)の例である(別に「つべし」の形にも、一例同様の例がある)。それに対して、「う」を訳語とする九例のうちには、疑問詞を疑問の標識とする不定方式の例が五例あつて、残る四例が特定方式の例である。その四例中の二例は単独方

式の例であり、残る二例は二つで一対をなす並列方式の例であった。<sup>(4)</sup>

そこで、右の分布を、特定方式と不定方式という疑問表現の方式の別  
に集計すれば、特定方式の例は八例までが「うず」、残る四例が  
「う」で、計十二例であるが、不定方式の例は五例とも「う」に集中  
していることになる。

次にその例を示す。(42)(43)は「うず」を訳語とする特定方式の例、(44)  
〜(47)は「う」を訳語とする例である。後者のうち、(44)は不定方式の例、  
(45)(46)は特定方式の例、(45)(46)はその単独方式、(47)はその並列方式で  
ある。

(42) たゞ一所でいかにもなるやうに申てたばせ給ふべうや、候らんと

（覚一本・二・少将乞請）

・……仰せられてくだされうずるか、と（天草版・一・五・四一頁）

(43) 是をめし出され、刀の実否について咎の左右あるべきか。（覚一

本・一・殿上閣討）

・……咎の御沙汰をもなされうずるか。（天草版・一・一・九頁）

(44) こはいかにすべきとて、公卿僉議あり。（百二十句本・四・鶴）

・これは何としてよからうぞと……（天草版・二・八・一四一頁）

(45) 大納言の左右の手をとってひっぱり、「いましむべう候やらむ」

と（覚一本・二・西光被斬）

・……「繩をかけませうか」と（天草版・一・三・二四頁）

(46) 後陣の勢をや、待つべき。（百二十句本・九・義経院参）

・後陣の勢を待たうか？（天草版・四・三・二三九頁）

(47) 淀、一口へや、向かひ候ふべき、河内路をや、まはり候ふべきと

（百二十句本・四・頼政最後）

・淀、一口へ向かひませうか？河内路へまはりませうかと（天  
草版・二・六・一二九頁）

反語表現に用いられた「べし」の訳語にも、助動詞「うず」と  
「う」の二語が認められる。しかし、反語表現の場合の訳語は、「う  
ず」より「う」のほうがはるかに多い。「うず」の例は五十九例確認  
できたが、「う」の例はわずかに六例であった。

次にその例を示す。(48)(49)は「うず」を訳語とする例、(50)〜(53)は  
「う」を訳語とする例である。

(48) 今度こそめさせ給ふ共、つみにはな、か赦免なうて候べきと

（覚一本・三・足摺）

・……なぜに赦免なうてあらうずるか、と（天草版・一・十・七五頁）

(49) たとひ命を召さるるとも、惜しかるべきわが身かは。（百二十句

本・一・義王）

・……惜しまうずるわが身か？（天草版・二・一・九九頁）

(50) 世を捨るより外は、今は何事をか申べき。（覚一本・二・阿古屋

之松）

・……今は何事を申さうぞ？（天草版・一・六・五七頁）

(51) 女房などの御ことにてわたらせ給ひ候はんには、何かは苦しう

候ふべきとて（百二十句本・十・重衡受戒）

・……何か苦しうござらうと（天草版・四・十一・二九七頁）

(52) この事行綱しらせずは、淨海安穩に有べしやとて（覚一本・二・

西光被斬）

・……清盛安穩にあらうかと云うて（天草版・一・三・二三頁）

(53) 若此謀反とげましかば、御辺とてもおだしうやおはすべきと申せ。

（覚一本・二・少将乞請）

・……おだしうやあらうと申せ。（天草版・一・五・三九頁）

仮定を表す「べし」に対する訳は、二例しかなかったが、二例とも

次のように助動詞「う」が用いられている。

(54) こはいづちやらむ。おなじうしなはるべくは、都ちかい此辺に

てもあれかし（覚一本・二・大納言流罪）

・……とてもうしなれうならば、……（天草版・一・七・五四頁）

(55) 世を通るべくんば、かくもあらましくぞ思はれける（百二十句

本・十・維盛出家）

・世を通れうぞならば、……（天草版・四・十四・三一二頁）

結局、(c)の文脈の「べし」については、疑問表現と反語表現におい

て、助動詞「うず」と「う」の訳語がともに認められた。疑問表現で

は全体として両者の数が接近していたが、疑問の方式の別に見れば、

特定方式と不定方式とで傾向の差もありそうであった。反語表現の場

合には、「う」を訳語とする例がはるかに多かつた。仮定表現の場合

の訳語は、助動詞「う」のみであった。

#### 四 訳語「さうな」の分布

室町期新出の助動詞「さうな」を訳語とする例は、「べし」の訳語に四例、「つべし」の訳語に一例あるだけである。併せても五例しかない。

まず「べし」の訳語になっているのは、次の例である。

(56) 君をもやがて取り籠めたてまつるべう候へども、何ほどのことか

わたらせ給ふべきなれば（百二十句本・八・緒環）

・あまつさへこの資盛をもそこで討ち果たしさうにあつたれども、

……（天草版・三・十・二〇二頁）

(57) 義勢ばかりでは此謀叛かなふべうもみえざりしかば（覚一本・二

・西光被斬）

・……この謀叛かなひさうにも見えなんだ所で（天草版・一・三・

二〇頁）

(58) かなふべしともおぼえ候はず（百二十句本・四・頼政最後）

・かなひさうにもごぞないほどに、（天草版・二・六・一二九頁）

(59) 大手ばかりにては勝負あるべしとも見えざりければ（百二十句本

・九・鴨越）

・……勝負ありさうにも見えなんだれば（天草版・四・八・二七〇

頁）

例(56)の原文の「べし」は、適当を表す会話文中の例であるが、訳で

は地の文でむしろ要約した言い方になっている。その訳文の表現性は、

「べし」に区別した意義の中では、結果の意義に近い訳といえよう。

例(57)(58)は、いずれも打消と共起している点に注意されよう。「べ

し」の对象的意義からいえば、結果を表す例ばかりである。「さう

な」を訳語とした例には、先述の「べうはない」「べうもない」など

と違って、直ちに「ない」に続いた例はない。

「つべし」の訳語になっているのは、次に示す疑問表現の例である。

原文の「つべし」は可能を表す例と見てよさそうであるが、訳語の「さうな」には、これも「べし」に区別した意義の中ではむしろ結果に近い意義のほうがめだつといえよう。

(60) 「射つべき者はなきか」(百二十句本・十一・扇的)

・「射さうな者はないか？」(天草版・四・十七・三三五頁)

「さうな」を訳語とする例は、まだ極めて限られているが、要約的な意味も含めて、「べし」の意義から言えば、結果を表す用法への偏りが最もめだつ。また一方では、五例中の三例までがそうであるように、打消との共起も注意されるのである。

## 五 結び——史的解釈

以上の調査結果から、中世末期口語の世界で、著しく衰退した「べし」に取って替わっているその後身、ないし、後継者を推定すれば、「うず」こそその代表的なものであることはや明らかである。平叙表現の「べし」の訳語がほとんど「うず」であったこと、その「うず」が「べし」の对象的意義のすべてにわたって認められたことがその理由であり、意志・勧誘・命令表現の「べし」の訳語もその判定を支持する。

しかし、反語表現と不定方式の疑問表現、および、仮定表現における「べし」の訳語には、「う」への偏りが認められた。室町期新出の助動詞「さうな」を訳語とする例もあったが、「うず」や「う」の例に比べると、それはまだ極めて限られていた。

そこで、「べし」に対する「うず」の表現性と「うず」以外の訳語

の分布をめぐり、次の三点について、その調査結果の史的解釈を試みることにしよう。その一は、「べし」の訳語を代表する「うず」の表現性と、その広義の推量体系に占める位置である。その二は、反語表現と不定方式の疑問表現、および、仮定表現における「べし」の訳語が、全体からいつて例外的に「う」に集中した理由である。その三は、「べし」の訳語の一部に顔を出す「さうな」の時代性と、それを含む推定の助動詞の体系（推定体系）についての見通しである。

まず、その一の、「うず」の表現性と、その広義推量体系に占める位置から考える。中世口語の推量体系については、狭義のそれに限って、通史的にまとめてみたことがある。<sup>(5)</sup> 中世口語における狭義の推量体系は「うず」「う」「らう」の三語で構成された。对象的側面の比重が最も大きく、いちばん客観的な表示性をそなえるのが「うず」、逆に事柄を想定する作用度が最も強く、主観的な表示性に富むのが「らう」であり、「う」は「うず」と「らう」の中間に位置して、その三語は想定作用度の強弱などの別に機能を分担していた、というのがその要点であった。中世末期における「べし」の代表的な訳語として、かつての「べし」に対する代替性が「うず」において最も顕著であったのは、その对象的側面の比重の大きさや、客観的な表示性によると見てよからう。「うず」が「べし」の代表的訳語であり得たことは、その「うず」が狭義の推量体系を構成していただけでなく、より客観的な推定作用に関わる助動詞の体系にもまたがる働きをしていたことしたがって、推定体系の再編にも関わっていたことをうかがわせる。

「うず」の原形「むず／んず」は寛一本や百二十句本にもすでに少

なからず用いられているが、その場合は天草版でもたいていそれから転じた「うず」が用いられている。その意味で、天草版における「べし」の代表的訳語としての「うず」は、特に中世末期に限らず、中世口語の世界では、もつと早くから「べし」と交替してきたと見てよいのである。

「べし」が担う対象的意義を、「うず」が質的にどこまで代替できたかの判定はむずかしいが、少なくとも文脈に助けられれば、一応その対象的意義の全体に対応できる適応性はそなえていたことになる。「うず」は意志・勧誘・命令を表す「べし」に対しても、その訳語になつていたので、対象的意義に対応できただけでなく、それらの作用的意義についても、ある程度押さえうる訳語だったと見うる。

次に、その二、反語表現と不定方式の疑問表現、および、仮定表現における「べし」の訳語が、全体として例外的に「う」に集中している理由について考える。反語表現には、もともと「う」の原形「むん」が用いられることが多い。「う」を用いた例も、より早く抄物類にも容易に拾えるのである。

- ・天子ハ尊ト云ヘドモ、父ガナウテハド、コカラデコウゾ（史記抄・高祖本紀・六49才）
- ・今モセバ、ナゼ、ニナラヌ事ガアラウカゾ（四河入海・一・二63才）

また、反語表現の表層は、直ちに否定されるためのいわば誤答案であるが、それに対していえば、疑問表現の表層は、話し手みずから解答を求めていることに伴う積極的な解答案であるという違いがある。

推量の助動詞の担う役割も、その解答案性によって、疑問表現にお

るそのほうが平叙表現のそれと連続しやすいはずである。現に、具体的解答案によって成り立つ特定方式の疑問表現における「べし」の訳語は、十二例中八例までが、平叙表現などと同じ「うず」であった。反語表現における「べし」に、「うず」を訳語とする例が相対的に乏しく、「う」に集中するのは、否定されるための誤答案に過ぎないその表層のいわば虚構性が、一般に「うず」の客観的な表示性とは調和しにくかつたせいではないだろうか。なお、疑問表現でも、不定方式の例五例の訳語は「う」に集中していた。疑問詞を疑問の標識とする不定方式の解答案は、いわば具体的な案を欠く場合に採られるものであり、表層に具体的な解答案が欠如する点では、反語表現にも通じる点がなくはない。そのあたりに「うず」にはなじまない点があつたのかもしれない。

近代語における狭義の推量体系は、「う」と「らう」を中心に再編され、ムード形式化とムード性の分極化を進める。その際、「うず」は中世口語における分布から見ても、主として「う」に統合されていくものであつた。反語表現や不定方式の疑問表現における訳語の「う」への偏りは、すでに述べたような「うず」とのなじみにくさが、そのような通時的变化を他の場合より一足早く可能にしたということも考えてよからう。いずれにせよ、反語表現や不定方式の疑問表現における「べし」の訳語の「う」への偏りは、「う」自体の「べし」に対する後身性以上に、それらとの共起による制約の結果と見てよいであらう。

仮定表現の訳語が「う」に限られるのは、「う」がその原形の

「む」の時期からそなえていた、仮定の意義との親密な関係によるであろう。「む」は未然形に付いて仮定を表す接続助詞「ば」の成立事情にも関わるほか、複文前句の「む」は文脈上仮定の意に訳される場合もあり、「う」と仮定との間柄には、古来かなり近いものがある。その意味で、原文の仮定表現における「:べくは」に対して、多く「:うならば」の形で現れる訳語の「う」への偏りは、「べし」自体の後身性によるよりも、仮定を表す接続助詞「ば／は」の後身である「ならば」との共起性に制約された結果と解釈してよからう。

次にその三、「べし」の訳語にちよつと顔を出していた「さうな」の表現性と、それを含む推定体系の見通しについて述べる。「さうな」は室町期新出の助動詞であった。しかし、「うず」はすでに述べたように、狭義の推量体系と推定体系とにまたがり、そのそれぞれの再編に寄与したであろう。「べし」の代表的な訳語としての「うず」は、狭義の推量体系の側におけるそれであるより、もちろん推定体系の側に張り出していたそれと見る必要がある。その推定体系には、鎌倉期からすでに「げなり√げな」が現れ、「さうな」が顔を出すのは室町期であるから、「さうな」は「うず」と対等に並ぶものではなく、むしろその次の世代の一端を担うべき訳語といえよう。この「さうな」は、基本形を「そうだ」に変えて、今日でも古典語の「べし」の訳語に用いられることが多い。なお、現代語における「べし」の訳語としては、「はず(だ)」のほうがより代表的であろうか。その早い例も「さうだ」より少し後れて次のように現れはじめる。

・もつはづならばもたせう程に、先おまちやれ(虎明本狂言・犬山

伏)

・月のおとこにばかり逢ふものは、名もたかふならぬはずでござんす。(仮・難波鉦・一)

しかし、近世以降、「さうな√そうだ」や「はず(だ)」が、かつての「べし」に対してどのように対応していくのかは、また別に検討を要する課題である。

注

- (1) 山口堯二「『べし』の通時的変化」(『京都語文』第四号)。
- (2) 福島邦道「天草版平家物語解題」(勉誠社文庫8『天草版平家物語・下』)。
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 山口堯二『日本語疑問表現通史』(一九九〇(平成二)年、明治書院)による。
- (5) 山口堯二「推量体系の史的変容」(『国語学』一六五集)。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 注(5)に同じ。
- (8) 山口堯二『日本語接続法史論』(一九九六(平成八)年、和泉書院)第七章。
- (9) 山口堯二「助動詞の伝聞表示に関する通史的考察」(『京都語文』第二号)。

(やまぐち ぎょうじ 国文学科)

一九九九年十月十五日受理